

海洋汚染 鯨類に影響

松山で講演会 「人間への警鐘」

クジラやイルカなどを研究する日本セトロジー（鯨類学）研究会の公開講演会「イルカが語る人間活動の功罪」が24日、松山市文京町の愛媛大であった。研究者3人が海洋汚染の鯨類への影響やイルカと触れ合う意義などについて話した。

研究会の第25回大会の一環で、県内外の研究者や学生、一般市民など約90人が参加した。約40年間、海洋汚染を研究している愛媛大の田辺信介特別栄誉教授（63）は「環境化学」は「地球規模の海洋汚染と鯨類の健康リスク」と題し、毒性が強く、体内に長期間とどまるダイオキシンなどの残留性有機汚染物質によるクジラなどへの影響

について講演した。田辺教授は陸地よりも海にすむ哺乳類の方が物質の蓄積濃度が高いことを紹介。皮下脂肪が物質をためる▽脂肪が物質をためる▽と受け止めるべきだ。

田辺教授は「鯨類への影響を人間への警鐘と要因を示した。乳で子に移行する▽分解力が弱いと三つの要因を示した。



海洋汚染によるクジラなどへの影響を話す愛媛大の田辺信介特別栄誉教授。24日、松山市文京町

人の食料資源は生態系の産物。現在の人間中心の社会観・環境観をいかに生態系本位にしていくかが重要とし、環境化学物質の潜在的リスクを研究する重要性などを指摘した。

日本ドルフィンセンター（香川県さぬき市）で自閉症児らに実施しているイルカとの触れ合い活動や、瀬戸内海沿岸の遺跡から出土したクジラなどの骨に関する講演もあった。

（森口睦月）